

陸自駐屯地紹介シリーズ 第34回

剛健の碑の下で・前川原駐屯地

陸上自衛隊幹部候補生学校

駐屯地シリーズ編纂委員会

受け継がれる伝統

昨年初冬の編集委員会で、12月12日に陸上自衛隊幹部候補生学校において卒業式が挙行されるが、偕行社会長が初めて来賓として招待されたので随行取材するように指示があった。いずれ駐屯地シリーズに取り上げたい先であつたので喜んで受けた。

だが数日後、経緯を聞いて逡巡した。予め陸上幕僚監部から会長の出席について打診があり、招待状は幹部候補生学校長が上京されたおり、偕行社事務局で直接会長に渡されるといふ丁重な運びがあり、会長は主賓としてた一人の祝辞の要請を受けた事情を知つたのである。事務局局長以下の喜色溢れる興奮の意味が理解出来た。

会長の出席は、近年の陸上自衛隊と偕行社の関係緊密化の証として、戦後の偕行社が受け継ぎ奉じ続けた陸軍建軍以来の国に対する篤い想いを、新国軍の將校たる者に伝える儀式として位置づけられるということに気が付き、

それを十分に記述出来るかという不安に陥つたのである。

だが筆者名義の取材申請書に対して丁重な応諾の回答を頂き、取り消し不能の航空券は既に手元に有つた。ならば乏しいながら全力を投じて任を果たすだけのこと、まず取りかかつた準備は幹部候補生教育の確たる資料収集であつた。これは尊敬する先達から話を聞くことから始まつた。

福岡県久留米市には陸上自衛隊の駐屯地が2カ所ある。第4特科連隊が所在する「久留米駐屯地」と、陸上自衛隊幹部候補生学校が所在する「前川原駐屯地」である。時々聞く「久留米の幹部候補生学校」とは「久留米市にある前川原駐屯地の幹部候補生学校」を短くいう言葉である。羽田から福岡空港まで約2時間、高速バス約50分で西鉄久留米駅に着き、「青峰団地」行きバスに乗り換え20分で「自衛隊幹部候補生学校」に着く。停留所の向かい右に「前川原駐屯地」左に「陸上自衛

隊幹部候補生学校」の標識が埋め込まれた煉瓦色の門柱があり、その奥に23万平方メートルに涉つて広がるのが幹部候補生学校である

幹部候補生学校の位置づけ

この学校は、陸上自衛隊の幹部自衛官となるべき者が最初に入校する全国唯一の学校である。開校以来受け継がれてきた「質実剛健にして清廉高潔」なる校風のもと、幹部自衛官として統率力に優れた人の和を重んじ組織体の推進力となりうる人材を育成している。

学校の歴史

かつて古い先輩が咳くのを聞いたことがある。「海上自衛隊は幹部候補生学校を海軍兵学校の跡地の江田島に置いたのに何故陸は久留米なのか」、咳いていた人は恐らく「市ヶ谷台」「振武台……朝霞」「相武台……座間」のいずれかを懐旧しておられたのである。事実幹部候補生教育が久留米で開始されてなお、前川原駐屯地が幹部候補生学校の恒久位置として施設建設予算が投入されるまでに若十の歳月が必要であつたようである。久留米市史から要約する。

「平時、関東地方の陸軍施設跡は駐留米軍施設等として使用され、富士地区以外には空き施設が無く、しかも米軍は朝鮮戦争勃発直後の多忙を極める中、幹部候補校のために施設明け渡し



現地戦術

をする余裕がなかつた。一方久留米市は終戦後も陸軍時代の軍都の気風を残し、警察予備隊発足の早期から誘致運動を行つていた。運良く久留米市には米軍管理要員だけで未使用状態の陸軍施設跡があり、昭和27年1月ここに陸軍普通科学学校を設置して、その中に幹部課程設置が出来た(「要約」)

要は、首都圏に適地が無かつたため九州に幹部候補校を持つて行つたのが理由だとする客観的な記述である。

一方、極めて情緒的に、北九州の防人の地の歴史こそが幹部候補校の場所を久留米にした理由だと言ふ人がある。古代の神功皇后に従い海峡を越えた神々

が北九州各地に鎮まられる事を挙げ、次いで二度の元寇の戦で奮闘した菊池一族をはじめとする北九州の豪族の勲、下つて南北朝時代の同じく菊池一族の南朝に捧げた忠誠、上海事変の爆弾三勇士に胸を張り、世界の陸軍戦史に輝く金光恵次郎少佐少候7期以下の拉孟守備隊に涙し、久留米にあった陸軍第1予備士官学校を卒業しフィリピンで残置課者の星霜を戦い抜いた小野田寛郎少尉(小野田氏と呼びたくない。軍人として最大の畏敬を込め本当は少尉殿と呼びたいところ)を任務遂行の鏡とすれば、これらに縁の久留米に勝る幹候校の適地がある筈はないという郷土意識が言わせる論である。

確かにもし幹候校が首都圏にあったなら、一時期は激しい反安保闘争や反基地闘争に晒され、訓練も俾ならなかったかもしれない。反面久留米地域の人が寄せる温かい好意は一入であった。要は「久留米を選んだことは本当に良かった」結果となったのである。

やがて昭和29年7月に総隊学校が富士地区に移転するに際し幹候校のみは独立して前川原に残り、39年にはここに幹候校の恒久地とする事が決定され、この間37年に2号候補生隊舎、38年には3号候補生隊舎、39年には学校本部・講堂・武道館が恒久的構造で建設され以後逐次建設が続けられて今日

の姿になった。

次に教育制度の面から幹候校の歴史を概見してみたい。

昭和27年、警察予備隊総隊普通科学校に幹部候補生隊が置かれ、部内選抜の一般幹部候補生I課程と一般大学卒業者の一般幹部候補生U課程がスタートした。昭和32年には防衛大学校第一期生が幹候校に入校することにより一般幹部候補生B課程がスタートし、昭和38年には3尉候補者SLC課程が、55年には医科歯科幹部候補生課程(M・D課程)と婦人自衛官幹部候補生課程(WAC課程)がスタートした。その後平成8年には防衛大学校女子学生が幹部候補生学校に入校し男女合同の教育が開始される事によりWAC課程は廃止となった。平成18年には幹部基礎(看護師)課程(N課程)がスタートし、平成19年度からはB課程とU課程が一体化して新しくB・U課程として発足した。

注

B課程 防大のローマ字のB

U課程 大学のユニバーシティのU

I課程 部内陸曹(下士官)選抜インターナルのI

M・D課程 医科メデイカルのM

N課程 看護師ナースのN

SLC課程 3尉セカンド・ルーテナ

ント・コースの頭文字、曹長・准尉から選抜

幹候校の組織

自衛隊においては、学校は大臣直轄の機関である。校長・副校長の下に、企画室、総務部、教育部、学生隊、教導隊が置かれている。

企画室

学校教育の基本方針等を管掌し校長を補佐する部署であり、その長は副校長が兼ねている。

総務部

1等陸佐の総務部長の下に総務課、管理課、会計課、衛生課、教材課が置かれている。学校を支える地味な業務に対する部長の統率方針は「誇りと思いやり(愛情)」であるとのこと。

教育部

教育部には、教務課と第1教育科から第5教育科まである。教務課において教育課目表を作成し、教育部の頭脳的位置に立ち、教育予定調整を行い、校外調整、教材等の統制、記録、統計、教育訓練費に関することをを行う。各科で担当する教育内容は次の通り。

第1教育科においては戦術

第2教育科では服務・防衛教養(防衛法制、教育訓練管理、国際平和協力、心理、カウンセリング、健康管理、英語等) 統合、安全管理概説

第3教育科では防衛基礎学(装備概論、射撃、対空戦、通信電子) 戦闘戦技訓練(特殊武器防護及び通信訓練)

第4教育科では防衛基礎学(気象・地形、交通)及び戦闘戦技訓練(野戦築城及び偽装)

第5教育科では戦史

学生隊

学生隊には、1等陸佐の学生隊長のもと、学生科と訓練科からなる学生隊本部と2等陸佐を長とする第1から第4候補生隊があり、入校してきた各課程候補生は候補生隊に所属して営内で起居する。資料によれば学生隊が担当するのは精神教育の使命教育と徳操教育



遠泳訓練

育、戦闘戦技訓練の内の基本教練、戦闘訓練、火器及び射撃、格闘及び体育概説、体育技能、各種検定等と規定されている。だがもつとも大切なのは、学生隊長、候補生隊長、区隊長の背中が見せる教育ではあるまいか。学生隊職員に補職されると云うことは、自らの挙動を手本として候補生達の全人格教育を行う責任を負うのだということが歴代の伝統となっている。

教導隊

教導隊は隊本部と1コ小銃小隊の41名からなっている。筆者の記憶では各個訓練から小隊訓練まで見事な模範を示す凄みのある陸曹(下士官)の集団であった。今も精銳の集まりに違いない。

着校から卒業まで

第88期一般幹部候補生(B・U)課程の入校から卒業までの道を辿って見たい。

この88期B・U課程は新しい考えのもとで実施される課程で、防衛大学校出身者も一般大学出身者も男女別なく同じ場所と同じ教育を実施したのである。目指すところが陸上自衛隊の団結であることは直ちに理解できる。

導入期

19年3月27日 候補生着校。
(防衛大学校、一般大学卒業者)

入校式まで準備教育を受ける。

入校式

4月9日 入校式

4月22日 開校53周年記念行事

5月 知覧の特攻平和会館研修

6月末までには

赤土の高良台での集中訓練

陸・海・空三幹部候補校合同研修

第1次大野原訓練

練成期

7月 はじめ深江海岸で6km遠泳

7月中旬第2次大野原訓練

9月5日伝統の高良山登山競走

完成期

卒業式前の約80日は多忙であった。

9月20日から10月4日大野原訓練、

9月から10月「ほとめきファミリー」。

「ほとめき」とは久留米弁で「おもてなし」の意。現校長の着任歓迎会で

協力団体の会長との話から実現したものだそうである。幹部候補生はグルー

プで協力者の家庭を訪問し、郷土料理

に土地のお話を伺うなど、久留米を第

二の故郷とするようにと暖かい家庭の

もてなしを頂いた。このもてなしに対

する唯一最大のお礼は任地で活躍する

姿をご報告することではあるまいか。

10月14日から20日沖縄現地教育、

写真でみるところ、この教育は単に

沖縄での戦闘経過を知識として身につ

けるばかりではない。本土での防衛準備

備が整うまで一日も長く持久しようと

した軍官氏が文字通り命を懸けた献身

に思いを致し、祈りを捧げ、国守りへ

の決意を更に確たるものにする機会であ

る。黎明の塔に拝列する後ろ姿が

それを語っている。

10月25日剛健の夕べ

ジンギスカンと「剛健踊り」で、青春の情熱を思う存分発散する祭である。

10月30日藤山武装障害走

開壁、ロープ登坂、低鉄条網、実弾

射撃など20個の障害を男性26分30秒以

内、女性32分以内に通過しなければな

らない。

10月5日から10日田原坂現地戦術

11月16日から20日総合訓練、

訓練の総仕上げ、重い装備で2夜3

日不眠不休の100km行進の後、攻撃行動

で締め括る。行進経路の途中では割烹

着のご婦人の集団が激励の差し入れを

して下さり、或いは幼稚園児の集団が

歓声と共に出迎え紅葉のような小さい

手とハイタッチを交わしたことは、疲

れを癒したばかりでなく、厳しい訓練

の合間の暖かい思い出として長く記憶

に残るに違いない。

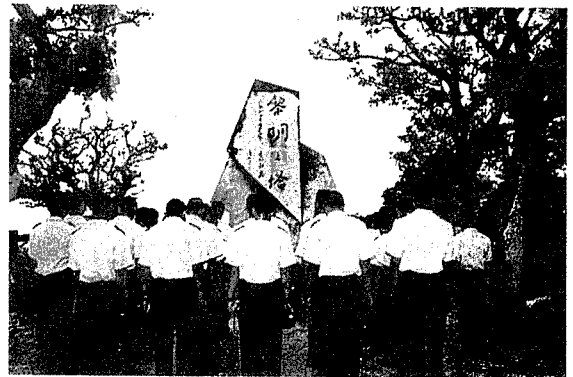
これも幹部候補生学校が九州久留米

に存在する恩恵ではなからうか。

11月26日から12月1日韓国研修

金

これについて、考える事がある。



沖縄現地教育

大中大統領以来韓国の対日感情は必ずしも良いとはいえない。むしろマス

コミは反日感情を書き立てていた。そ

の中で韓国士官学校候補生との交流、

「非武装地帯」見学等を受け入れ、さ

らには白善輝大将の講話があったと云

う厚遇に意外に思う他はない。

(注：白大将は平壤師範から40年満洲

国陸軍軍官学校卒、45年に後の韓国軍

になる国防警備隊に入隊、第1師団長、

第1軍団長を経て参謀総長、連合参謀

会議議長、60年退役。朝鮮戦争初期の

北鮮の猛攻撃を耐え抜いて韓国軍のみ

ならず米軍の壊滅をも防いだ英雄的将

軍である)

何故韓国が我が幹部候補生の研修を受け入れてくれたか。イラク復興支援群の輝かしい成果が、かの国の認識を変えた気がする。幹部候補生は、同胞相戦った悲惨さに思いを致し深刻に考へるところがあつたに違いない。

12月12日卒業式

卒業式前日

校長取材

卒業式の取材は前日から開始した。式の当日、インタビュアーなどに拘わつておれない忙しさが予想されたからである。僥倖にも校長に30分ほど時間を割いて頂けた。学校到着後広報室で、頂いた資料を速読し校長室に伺つた。夫婦揃つてテレビのイラク報道を見ていた時期、髭の佐藤先遣隊長の、自衛官としての能力ばかりではない外交手腕に快哉を感じていたところ、続いて現れた復興支援隊長にはさらに驚いた。威風凛々した姿と「武士道の国から来た」全真生きて日本に連れて還る。漏れ聞く発言にそれこそ熱狂的に手を叩き、家内共々何時しか「イラク復興支援群」チャンネル追っかけに変身していたのである。言うなれば我ら夫婦の「偶像」であつた。その「偶像」の執務室に入るのである。平静でいられる筈はない。挨拶の後、椅子を勧められた。優雅な所作の紳士であつた。筆者の質問の「幹部候補生教育に寄せる

校長の考え方」に対し、筆者を見据えて順序立てて話された。内容は、武人のあるべき姿について校長の厳しい考へであつた。因みに卒業式式辞において校長が卒業生に諭された事は次の3項目である。

「自ら進んで厳しさを求め、常に隊員と共にあつて任務を完遂せよ」

「21世紀を担う、本物で一流の武人たるべく引き続き修養に努めよ」

「部隊団結の核心となれ」

予定時間を過ぎて、階段降り口まで見送り頂く恐縮の中にやや残念に思うことが一つあつた。出来ればサインを頂き家宝にしたいと用意した色紙をどうしても出せなかつたのである。サインは当初家内が言い出し、途中から筆者自身の願望になつたが、取材者として不謹慎ではと出せなかつた。

前日風景

取材の興奮は納まることなく広報室に戻り、気分を収めるために玄関前の広場に立ち校内を見回した。卒業式前日の忙しい姿があつた。卒業式に備へて「碑」の地域を清掃する職員の間で、ある。(編集注 図書史料館の周りに植木に囲まれた百坪ほどの芝生があり、三つの碑が並んでいる。「剛健の碑」は幹部候補生学校の修学の象徴であり、「剛健五訓の碑」が並ぶ。「礎の碑」は19年6月号5頁参照。幹部候補

生学校卒業生殉職者の碑。いわば雄健神社的な存在であろう)

中に肩に2本のバーの階級章をつけた佐官たちも混じつて、これが皆忙しく立ち働いている。指示する声も姿もない。それにも拘わらず低い植込みの根元の木の葉を取り除くため膝をついて手を伸ばす姿があつた。総務部長の言葉「誇りを持ち愛情をもつて」を思い出した。

清掃中の芝生を抜けて図書史料館へ向かつた。ここには是非拝観せよと勧められていた展示品があつた。館長の丁寧な接遇を受けて2階に上がり顕彰室で黙祷を捧げたあと史料室でまず拉孟守備隊長金光忠次郎少佐少候7期の遺影を拝観した。中学校の校長先生を思わせる白哲のやや長い而立ちのお顔があつた。この静かなお顔が蒋介石総統から逆感状を受けて陸軍の歴史に名を残した指揮官であつたのだ。

もう一つは小野田寛郎少尉の写真と軍刀である。写真はマルコス大統領との写真であつた。白布を巻いた軍刀を大統領に差し出す所作は降伏を意味する。しかし軍服は傷みはしていたが少尉の瞳は敗者のもではなかつた。精悍、猛猛でさえあつた。マルコス大統領が受け取つたその場で返されたという厚身の軍刀は、よく手入れされて抜き身で陳列されていた。闘いの具とし

てあつた日本刀が、今は一カ所黒い打痕を残すというものの研ぎ直されて展示の宝に姿を替へていた。骨董としてはなく「日本人斯く戦へり」の形見として精神を宿し飾られている。必ずや幹部候補生たちの心を打つに違いない。

その夜は、早く宿に入り原稿素案をまとめるつもりであつたがノートを前にして文章は一行も進まなかつた。興奮しすぎたのである。

卒業式

明けて12日早朝5時半過ぎ、正門前に到着した。式の日の朝を取材する為



100km行進

である。タクシーを降りるとすぐ警衛が出てきた。取材の旨を述べると「聞いております」と潜り戸から面会室へ案内してくれた。

西国の夜明けは遅く校内を見通すことは出来ない。6時少し前に出勤者がポツポツと、6時に門扉が開かれ続々と登庁してきた。

空は生憎の小雨模様であった。広報班員とともに取材をした。いずこも学校職員が動き回り、行き会った総務部長が「我が校には窓際などと云う無駄な席はありません」と笑いながら挨拶を返してくれた。その通り、殆どの者が立って、或いは動きながら仕事をこなしていた。中に、電話機子機を肩に装着し飛び回る女性広報班員が凛々しいばかりであった。まだ国旗掲揚前、則ち課業開始前の姿である。

卒業式典

式は10時から開始された。

開式の辞、国歌斉唱、陸上幕僚長に対する敬礼に引き続き卒業証書が卒業生各人に手渡され、続いて優秀賞の授与、校長の式辞、陸上幕僚長訓示と続いて、祝辞となった。祝辞は偕行社山本会長ただ一人であった(4頁に掲載)。このことは後述べたい。

祝賀会

卒業式の後、食堂で祝賀会食があった。卒業生、父兄、来賓が一同に会し

て壮観であった。会食に先立ち防衛大 学校長、元統合幕僚会議議長西元徹也氏、各方面総監、元幹部候補生学校校長大勢がそれぞれに短いお祝いを述べられ、卒業生のお礼の言葉があった。そして食事が始まった。前の席の卒業生が祝いのまんじゅうまで完食し、20代と70歳間近の胃袋の力の差を見せつけられた。

また、偶然というか、前の席に座った卒業生と筆者は東京の同じ私立学園の同窓であった。

卒業記念観閲行進

会食を終え、卒業生は武装して全天候グラウンドに整列し、来賓親族の参観する中、観閲式が実施された。陸上幕僚長折木陸将と幹部候補生学校長番匠陸将補が臨場し、まず榮譽礼、受礼者は多数の上級者がいる中で校長番匠陸将補であった。巡閲となった。観閲官は番匠校長ただ一人であり陪乗者はいない。観閲行進が始まると何番目かの区隊の指揮官の号令が凛々しく鋭い女性の声であった。

方面総監への申告

観閲行進が終わり待機位置に戻ると指示により一斉に歓声を挙げて赴任先の各方面隊別に並び替えた。そしてそれぞれの方面総監に対して申告を行ったのである。こうして卒業生は職種(兵科)未定のまま、3月末まで全員が各

方面隊の普通科連隊に隊付き勤務の更 に厳しい日々を送って、職種決定、3 等陸尉任官の日を待つ由である。今期 からの新しい措置である。

この後飛行機の時間で最後まで見届 けられなかったのは残念極まりなく、 心を残しながら帰途についた。

帰途飛行機の中で、僣越きわまりな いことを承知で、あの若々しい卒業生 たちに語りかけたい言葉を頭に練り返 していた。

第一は、諸官は式辞、訓示、祝辞、 テーブルスピーチ、更には学生隊長以下 の餞の言葉を噛みしめながら、隊付 き先で国家、国民、部下とその家族が、 諸官に何を期待しているかを考えて、 精一杯に生きて欲しい。部隊では「この 男はリーダーたるに足りる資質を 持っているか」と云う上下からの評価 が常に行われよう。特に下からの逆評 定には絶対に誤魔化すことの出来ない 厳しさがある。この関門は古今東西い ずれの武力集団でも経て来たしきたり である。新品3尉は苦勞するぞ。それ を乗り越えてこそ幹部である。

第二は、卒業式に偕行社山本会長が ただ一人祝辞を述べた意味を感じて欲 しい。各方面に多忙な会長が、この祝 辞は誰にも任せず、一人構想をねり、 何度も推敲されたと漏れ聞いている。 あの祝辞には陸軍、陸自の先輩の1万

人を越える偕行社会員の顔が背景にあ る。そればかりでなく明治建軍以来国 防に殉じた全陸軍将校の想いが会長の 肩に担われていた。「この国を頼んだ ぞ」という無言の、万感の想いなのだ。 心から卒業生一同のご健勝を祈る。

今回の取材にあたり実に多くの方々の 啓示を頂いた。 防大時代の訓練教官

元業務学校長 大東信祐氏 陸自57

幹部候補生学校の区隊長 元体育学校長 秦政美氏 陸自57

偕行社事務局長 元少工校長 菊地勝夫氏 陸自60

航空管制特技の先輩 元中管気隊長 竹内武司氏 陸自62

秋田BOQ(独身宿舎)時代の先輩 元北方総監 大越兼行氏 陸自63

偕行社事務局副長 松田純清氏 陸自63

幹候校同区隊 元幹候校長 伊藤忠臣氏 陸自64

また 卒業式という多忙極まる中の取 材に応じて頂いた校長はじめ皆様に対 し心から感謝申し上げます。

文責 松村興延 陸自64